

「日本の景観を良くする国民運動推進会議」全国大会

日時 平成19年6月1日（金）

会場 ニッショーホール（日本消防会館）

基調講演

「日本列島の文化的景観」

川勝 平太 氏（静岡文化芸術大学学長）

（司会） 皆様、大変お待たせしました。ただいまより、静岡文化芸術大学学長、川勝平太先生より、「日本列島の文化的景観」と題しましてご講演をいただきます。

まずここで川勝先生のプロフィールをご紹介させていただきます。川勝先生は1948年京都にお生まれになり、72年早稲田大学政治経済学部をご卒業、75年同大学院を修了され、85年オックス

フォード大学博士課程に進まれ、後に早稲田大学教授、国際日本文化研究センター教授を経て、2007年4月より静岡文化芸術大学学長に就任されています。ご専門は比較経済史です。先生は小渕内閣における「21世紀日本の構想懇談会」の中心メンバーとしてご活躍されました。現在、安倍内閣における教育再生会議委員のほか、国土交通省の国土審議会委員、内閣府の美しい国づくり企画会議委員などの要職に就任され、ご活躍されています。

また、先生は21世紀の日本文明にふさわしいビジョンとして、「富国有徳」を唱えられまして、美しい国土を持つ世界に誇りうる日本列島・庭園の島（Garden Islands）構想を提唱されています。主な著書に『日本文明と近代西洋』『富国有徳論』『文明の海洋史観』などのほか、美しい国づくり3部作としまして、『「美の文明をつくる」－「力の文明」を超えて』『「美の国」日本をつくる』『文化力日本の底力』があります。

それでは、お呼びしたいと思います。皆様、大きな拍手をもってお迎えください。川勝先生です。お願いいたします（拍手）。

（川勝） ありがとうございます。川勝平太でございます。今日は、「日本の景観を良くする国民運動推進会議」、この晴れやかな式典の中で、受賞されました皆様がた、どうもおめでとうございます。

静岡文化芸術大学という大学は、まだ若い大学です。これは亡くなられた高坂正堯先生というかたがいらっしゃいまして、日曜日の「サンデープロジェクト」で吉本興業のお笑いの島田紳助さんを相手に、日本の国の形について柔らかい京都弁でしゃべっておられたかたですが、そのかたが幻の初代学長でした。ちょうど学長に就かれる直前に、惜しいことに亡くなられまして、東京大学の名誉教授で大変しゃれた文化人だった木村尚三郎先生が初代学長として去年までいらしたのですが、この先生も惜しいことに天に召されまして、私が今、そこに就いております。

高坂先生が若いときに、国の形にかかわるご本をお書きになっています。まだ30代の前半だったと思いますが、『国際政治』という本です。その中で、国には三つ必要なものがあるとおっしゃるわけです。一つは、力の体系である。二つめが、利益の体系である。三つめが、価値の体系である。高坂先生にしては言葉がやや硬いですが、力の体系というのは、かりにテポドンが飛んできて国民の生命が



脅かされるということになりますと、これは国としての体を成さないということで、最低限の防衛力が必要である。それからまた、北朝鮮の例を借りるのは悪いかもしれませんが、国民の300万人もの人たちが飢えている、あるいは飢えて死んだということだと、これまた国としての体を成さない。したがって、貧困を克服するための経済力を備えているということが、また国としての重要な体系である。そして三つめに、もし国がばらばらであるとする、例えば今、中東で起こっていますが、価値観の違う人たちが互いに互いを排除するというようなことだと、国としての体を成さないということで、共通の文化的価値、カタカナ語で言えばアイデンティティというものが必要であるといわれています。軍事力、経済力、文化力の三つが三つながらに必要であるといわれているのが、『国際政治』という本です。

このかたは、佐藤総理、大平総理、それから中曽根総理の顧問をされましたが、戦後日本の国の形としては、吉田茂首相の敷かれた軽武装が良い、なるべく軍事力にはお金を割かずに経済力を上げることが重要であるというようなことを諄々と説かれていました。今、軍事力、経済力、文化力と言いましたけれども、三つとも必要ですが、国の歴史を見ていきますと、重点が移っていくと見て取れます。我々は非西洋圏で政治的な独立を堅持して経済的な発展に成功した唯一の国です。先進国の中に唯一、非キリスト教圏として入っている国になったのですが、その戦前期における日本の力点がどこにあったのかといえば、軍事力にあったといわざるをえません。日本は世界の鏡のようなところがありまして、世界のことを非常によく見ていて、それを日本の国内に移しながら形にしていくというところがあります。戦前期はいわゆる帝国主義の植民地獲得競争の時代で、そのような植民地にならないためには、列強の一つになるということが、いわば外から強制された、しかし日本が選り取った道であって、それは軍事力を中心にした国づくりであったといわざるをえません。

その結果、日清戦争、日露戦争、第一次大戦等々と勝ち抜きましたが、最後は敗戦ということで、そのすさまじい悲劇を体験した結果、軍事立国というよりも、最低限の防衛力を持って経済に力点を移す。特にアメリカの物量の前に我々は完膚なきまでに敗退したわけなので、そのアメリカに匹敵するような国になることが、実現できるかどうかということは当時としては確証がなかったと思いますが、経済力を中心に戦後50年歩んできたと思います。

その経済力は、60年代には軽工業においてアメリカの一角を崩す。70年代になりますと、あのオイルショックの中で、オイルすなわちエネルギーを垂れ流しにする国と、もったいないと思ってそれを大事にする国とでは、エネルギーを使う産業におけるパフォーマンスが違ってきます。すなわち重化学工業におけるパフォーマンスが違ってきて、70年代の間にアメリカの造船業、あるいは鉄鋼業を日本が抜いてしまっただけで世界一になるという快挙をやったのけました。そして今、トヨタがGMを猛追しまして世界一にならんとしておりますが、80年には国内における日本の自動車生産台数が、その年のアメリカの国内の生産台数を凌駕するわけです。何しろ昭和21年に11万台しかなかったわけですが、それが今は国内に走っている自動車が8000万台あります。その間にアメリカを抜いてしまうというようなことをしまして、そしてソニーだの、パナソニックだの、東芝だの、サンヨーだのといったところが互いに競争をしながら、電化製品も Made in Japan というものがアメリカでもヨーロッパでも使われるようになりました。そうしますと、ジャパン・アズ・ナンバーワンということが内外で自他共に受け入れられるということになりました、我が国は80年代にアメリカと対等になった、言い換えれば欧米先進国の仲間入りをしたのです。

そのころから、日本の国民の中に、物の豊かさよりも心の豊かさのほうが大事ではないか、何か失っているものがあるのではないかという風が吹いてまいります。その風はだんだん大きくなっていっ

て、心の豊かさ、これは勘定、計測できませんが、先ほどの写真でも町並みでも、「うわあ、いいな」という感動がありまして、その感動は地域を越えて、言葉を越えて、文化を越えて、間違いなく存在するものです。こういう心の豊かさというものは確実にある。こういうものも大切ではないか。そして、日本は軍事力、経済力というものは、それなりにトップクラスのものを備えています。それを必要条件として、その錦上に花を添える。花も実もある、そういう国にならねばならぬというときに、これからは文化力の時代だということで、この静岡文化芸術大学というものを、あの国際政治のリアル・ポリティックスの高坂正堯さんが、こういうものがこれから必要だと言われ、それを遺言として亡くなられたわけです。

そうした中で、日本の首相が美しい国づくり、あるいは美しい星へのいざないということのイニシアティブを執ろうと言われるまでになりました。どのようにしてこの国をつくっていくか。日本の、あるいは一日本人の一姿勢のものとしての日本認識、世界認識はどういうものを持てばいいかということが今、我々に問われていると思います。先ほど、私は日本は世界の鏡であると申しましたが、戦後、経済力で日本の国づくりをしていくというときも、世界は冷戦でしたが、ソ連もアメリカも、使えばお互いに全滅です。したがって軍事力は使えないので、一方は計画経済、他方は自由主義経済で、やり方こそ違えど経済力でお互いに競争したわけです。その結果、何が起こったのかというと、大量生産、大量消費、そして大量廃棄です。環境を破壊してきていたということです。

そして冷戦が終わって1992年、それより20年前の国連人間開発会議と申したでしょうか、その20周年ということで国連環境開発会議がリオデジャネイロで開かれたときに、当時、世界178の国連加盟国のうち170か国以上の国が代表団を送りまして、そこで生物の多様性条約というものを結びました。生物の多様性が重要だと言った。これは、やはりそれより20年前、ローマ・クラブが『成長の限界』という本を出しました。このまま資源を使っていくと、必ず枯渇して成長は限界に至るということを書いていました。そのときには、成長のために必要な石油や石炭、その他鉱物資源、森林資源といったものが枯渇するという警告でした。しかし生物の多様性条約は、人間にとって必要であるかあらぬかは問わず、この世に存在する生きとし生ける物すべて存在価値があって、その多様な生物から成る地球というものが危殆に瀕しているので生物の多様性ということをおお切にするという条約を結びましょうということになったわけです。

この背景には、そのときまでに、1960年代にガガーリンさんが宇宙に飛び出して初めて地球の景観について「地球は青い」と言われた。後に「水の惑星」という言葉に変わりますが、これはアメリカの宇宙飛行士たちが、大気圏の外に出て地球の写真を撮った。まさに漆黒のやみの中にブルーの美しい地球が浮いている。この感動が、地球というものを全体で見るという認識と同時に、この宇宙空間それ自体の歴史についての認識も深まって、我々が存在している自然界というものは、実は1回切りの歴史を歩んでいるのだと。そもそも宇宙には始まりがあった。146億年ほど前にビッグバンで大爆発をして、宇宙は膨張して、膨張すると冷える。冷えてぶつかり合って、最初は水素やヘリウムなど大変簡単で軽い原子しかなかったのが、ぶつかり合う中で複雑で重たい構造物ができ上がって行って銀河系ができた。太陽系が46億年前にできた。その中に地球が生まれた。地球はそのとき火の玉であった。ところがだんだん冷えて、水が生まれて、36億年ほど前に生物が生まれて行って、それは最初は非常に単純なものであったのが、だんだん複雑に分化していく。そして多様になった。宇宙爆発の所産がこの多様性で、地球であるわけです。

ですから、どれも皆重要であるという認識を1992年に、地球社会といいますか、国際社会が共有しました。これは20世紀における最大の国際会議になりました。言い換えますと、人類史上の最大の国

際会議になって、これをアースサミット（地球サミット）というようになりました。それからしばらくして、2001年に同じユネスコが、生物だけではなくて文化の多様性、文化というものもグローバリズムが疾行していく、全部一元化される。そうではないだろう、生物が多様性であるとするれば文化の多様性もやはり重要だと。これは全会一致で採用されるべきところ、アメリカとイスラエルだけが反対しました。そして、2005年だったでしょうか、文化の多様性条約というものが日本も含めて締結されたという流れがあります。

そうした流れの中で、景観を大切にしようということが起こっているのですが、もし1992年が国際社会における生物や文化というものの多様性を大事にするということの始まりだとすれば、日本における始まりは、やはり1995年の、あの美しい六甲山を借景にして、瀬戸内海を見下ろす神戸の町が一朝にしてがれきの山になって6000人もの人たちが命を亡くし、30万人もの人、30万ということは、神戸市民が150万ですから5人に1人が行き場を失うということが起こった。そのときの内閣は、必ずしも対応が良くなかったので、結果的には助けることのできる人が助けに行った。それは、身近にいる人はもとより、北は北海道から南は沖縄まで、だれもそれを人ごとだと思わなかった。これが日本のシビリティといいますか、市民レベルといいますか、その強さを意図せず世界に表すことになったのではないかと思います。

アメリカのロサンゼルス地震、あるいは先般のカトリーナのハリケーンの数日後には、市民が市民に対して銃を向ける、あるいは文明発祥地メソポタミアで戦闘終結宣言が行われたその日から店の略奪が起こる。町のオーダー（秩序）が崩れているときに、だれもそれに乗じて自分の利益を凶ろうということをしなくて、助け合うということをした。それは世界の人から見ると、ボランティアだと。そして、そのボランティア活動が澎湃として日本じゅうに起こってきて、ボランティア元年ということになりました。

そして、彼らはどうしたか。今日はその代表の方たちが、私のこの露払いの後、3時20分から鳴海先生の下で、現場の声をご紹介されて、良いものを学び合うという段取りになっているわけですが、ボランティア元年になって、自分たちの町は自分たちで守る以外にないということで、まちづくりの競争のようなことが起こって、その当時は3232の市町村がありましたが、失われた10年の間に5%、10%、15%ほどの、400以上もの市町村があつという間に町並み条例だの景観条例だのを作り始めるわけです。町をきれいにしていこう、お互いに協力して気持ちの良いところに住まおうではないかと。それに押されて、この景観三法ができたわけです。国が主導したわけではありません。市民です。国民です。国民運動は国民が起こしているわけです。表彰されたからといって、実はこれは政府主導ではない。国民が起こしています。そこに政府が押されて景観三法というものを導入して、こういうイベントも行われているということです。1995年以来、10年余りにわたって、我が国には町を美しくしようという流れが生まれてきているわけです。

そして、もう一つ興味深いことに、1989年に昭和の年代から平成に変わりました。そのときに、日本の北は北海道から南は沖縄の代表の人たちが、衆議院、参議院と今日も若干来ておられましたが、あの方々が、東京の役割は終わったと見られるのです。国の顔を変えようではないか、首都を移そうと。衆参両院全会一致で首都を移転しようという決議をなされたわけです。それが喪が明けた平成2（1990）年のことです。そして議員立法で法律が設けられて、1999年12月に法律によって定められた国会等移転審議会の調査報告書が出されて、新しい首都は那須野原がいちばんよろしいということでした。もちろんその後、国会では、これは自分の選挙区から遠いとか近いといった話を中心になって、今は宙ぶらりんになっていますが、私が申し上げたいのは、もし、例えば今日、あしたにで

も大きな震災でも起こったとすると・・・。これは起こりうるわけです。関東震災は元禄、安政、それからこの間の関東大震災と、大体 69 年を周期として起こる。何かあったときに東京から機能に移さなければいけないというときに、その報告書というものが生きてくると思います。

そうしますと、明治、大正、昭和、平成というのは「東京時代」と言うと思います。場所で言うと思います。なぜなら、その前は江戸という場所で言っていたでしょう。その前は室町という場所です。その前は鎌倉時代、平安時代、奈良時代。奈良、平安、鎌倉、室町、江戸というように、日本は場所で時代を表現するという世界で唯一の国です。奈良、平安、鎌倉、室町。実質上、いちばん中心は京都でしたが、京都は中国の文明を入れるという時代でした。京都という場所に中国の洛陽や長安など、黄河文明のエッセンスを最初に入れました。それから、揚子江（長江）文明のエッセンスは、南宋という国が中国に一時期ありました。それはちょうど平安末から鎌倉にかけてのころでしたが、南宋という長江文明のエッセンスが鎌倉に入ります。そしてそれが両方統合されて、室町京都には中国の文明のエッセンスが全部入るわけです。ですから、京都という町は東洋の文明の生きた博物館です。そういう場所としての特徴を持っています。

そして、江戸というところは京都から全く離れたところで日本独自のものをつくり上げました。江戸時代というのは日本が中国文明から自立した時代であり、江戸はそのシンボルだったわけです。ですから、中国文明から自立したということは、日本が独自になったということなので、日本の伝統、例えば今日はクールビズだということですが、和服を着るとネクタイを締めなくても済むわけです。そういう日本の和服（着物）は、着尺物一反を作るというものがきっちりできるのが江戸時代です。数寄屋造りもそうです。能もお茶も生け花も、あるいは日本の庭も、日本の伝統といわれるものは皆、江戸時代に確立します。言い換えますと、江戸という場所は日本が中国から自立したときの顔だったということです。その江戸時代の遺産を食いつぶしながら、西洋の文物の日本人が欲しいと思ったもの、必要と思ったものを全部入れ切った場所はどこかというとき、この東京です。

ですから、東京は国際都市ではありますが、こういうりっぱな建物も日本人が設計して、音楽界も美術も、西洋にあるほどのもので日本人が欲しい、必要だと思ったものを全部フルセットで入れたのが東京の時代であった。その東京の時代、欧米にキャッチアップするという時代が、先ほど申しましたように、終わったということです。つまり、東京時代とは欧米の文物を入れる時代であって、東京は西洋の文物の生きた博物館である。日本人は西洋というものを、経済力と軍事力が一体の富国強兵の国であるにとらえたわけです。そして戦前期には強兵に、戦後には富国に力点を置きながら、西洋と相並ぶ国になって今日に来ている。そして場所を変えようというときに、那須野原というものが出てきて、同時に世界では環境問題というものが出てきたわけです。

そしてもう一つ、1992 年に文化的景観という言葉ができます。これはリオデジャネイロで生物多様性条約が結ばれたときに、ユネスコの世界遺産を決める委員会で、世界遺産それ自体はそれより 20 年前からありましたが、日本はそれもほうったらかしにしていました。ところが、生物の多様性が大事だ、森林というものが大事だということを地球サミットで謳ったので、慌てて世界遺産条約に入って、ご承知のように白神山地と屋久島が世界自然遺産に入り、姫路城と法隆寺が文化遺産に登録されました。それは翌年のことでした。

1992 年、日本が世界遺産条約に加盟したその年に、ユネスコでは文化遺産のほとんどが先進国にありました。しかし、文化の共同体を民族といいます、文化というものは民族の数だけあるわけです。その民族は別にヨーロッパに集中しているわけではありません。他の地域にも民族の文化がある。文化としてはそれぞれ皆、お箸で食べようが、ナイフ・フォークで食べようが、手で食べようが、違い

があるだけで上下関係はありません。言葉は翻訳可能です。上下関係はありません。したがって、どうして世界文化遺産、人類の共有財産が、全部ではありませんが大半がヨーロッパにあるようなことになっているのかということの反省がありました。そして、いわば未開民族と見られていたニュージーランドのマオリ族の聖なる山がある。これはマオリ族にとって大事な山ですから、白人が移民をしても、そこに羊を放牧できないわけです。これは世界自然遺産になりました。しかし、この山の形がマオリ族の心の形ではないか。ならば、これは文化的な山だと。そこで、文化的景観という言葉を作ったのです。先ほど第二義的自然とおっしゃったでしょう。必ずしもそうではありません。人間の手が入っている自然も、もちろんワイルドネイチャーではない。しかしながら、心が入っている自然もまた文化的景観の範疇に入るのです。

そうしますと、富士山は信仰の山だ、立山は信仰の山だ、白山は信仰の山だと。今日は石鎚山の見事な景観が写真で紹介されていましたが、これもまた、そこに神々しいものを感じて思わず手を合わせたくくなるようなものでしょう。日本には借景という思想があるではありませんか。天竜寺は世界文化遺産になりました。天竜寺のお庭に池がありますが、その池に嵐山が映っている。嵐山は庭の一部です。金閣寺は銀座通りに持ってきたら、もうけばけばしくて格好が付きませんね。あれは自然の中にあるから良いのです。金閣寺は水に映っていますが、金閣だけが水に映っているのではなく、衣笠山が映っていますね。それは借景です。そのように見ますと、この日本の自然は、我々が借景という思想を持ち、また、山への信仰というものを持っていたことによって、人間が手を入れていようが、手を入れていまいが、文化的景観という意味においては全部がそうだということです。

このことに気がつかなかった。そのように流れが動いていることに気がつかなかった。気がついたのは1992年12年たった2004年のことです。景観法ができたときでしょうか。そのときに紀伊山地の霊場と参詣道が世界文化遺産になりました。例えば奥懸路があります。スペインの聖ヤコブをお祀りしている教会への参詣道が世界文化遺産になって、それは確かに文化の道にふさわしいようなたたずまいを呈していますが、修験道の奥懸路というのは、万丈の山、千尋の谷がなければ意味がありません。あるいは、那智の大社のご神体は何でしょうか。大社はりっぱですが、ご神体は滝ではありませんか。では那智の大社は何でしょうか。標識でしかないでしょう。失礼しました、そんなことを言うと思われませんが、とにかく、ご神体は滝です。

そして当時、文化的景観という言葉があるらしいということで、登録をする運動をされた三重県、和歌山県、奈良県の関係者のかたがたは、紀伊山地の霊場と参詣道とその周囲の文化的景観と言われました。神社や高野山の町石道など、文字どおり人間の手の入ったものが文化というイメージが非常に強かったので、「その周囲」と言ってしまったのです。ところが、見た人は、自然それ自体がなければここは意味がありませんよと。大きな杉にしめ縄というのは神の依代（よりしろ）だということを示している。自然それ自体に聖なるものを認めて、そしてそこで手を合わせるというところに精神性がある。周囲の文化的景観とは何事ですか、全部落としなさいと。文化的景観によって、あそこは世界文化遺産になったのです。

さて、そして今、日本が景観を良くすることによって国づくりをしていこうというときに、それなら思い切って日本を文化的景観として見てみた場合どうなるか。あるいは、国づくりを景観という観点からしてみたらどうなるかという問題がおのずと出てきます。自分の生活景観から始まって、そうしたものが多様なる中で日本という列島、北は北海道稚内から南は石垣島のある亜熱帯地域にまで広がっている、この全体としての日本というものの景観を、景観としてどう見るかというコンセプトが要るのではないのでしょうか。「我が町は森の町」「我が町は水の町」「我が町は瀬戸内海に浮かぶ美しい

島」と、いろいろアイデンティティがあると思います。

私は日本は世界を映す鏡だと言いましたが、この国は、まず島国ですね。もっとも島国であるということを皆分かっていながら、東京に生まれたり、あるいは岐阜県に生まれたりした人は、私は島の出身ではないと思っているのです。そうではないでしょうか。淡路島は島出身というのでしょうか。淡路島や佐渡島など、それより小さなものを島といいます。日本はしかし大きな四つの島から成り、合計すると7000ほどの島から成っているということを知識としては知っていながら、スケールによって、島をもっと小さなものと見る見方がありますが、全体として見るときには日本は島です。そして、そこに自分の生活の中で手を入れるところ、それから入れていないところを含めて、つまり全部文化的景観だと。この文化的景観として、人間が手を加えた自然、精神性を入れ込んだ自然というのは、私はGarden（庭）だと思います。野生のものではないと思います。Gardenの島々、Garden Islandsだということができると思います。一つのメッセージです。

文化的景観としての日本列島はGarden Islandsであるということです。それは単に日本を見ているだけではないのです。地球というものは水の惑星であるという共通の感覚があります。その水の惑星の環境が、今、ゴアさんの『An Inconvenient Truth』、これは世界を震撼させていますが、先進国、開発途上国が皆同じ運命共同体の中にいるのですよ、これ以上CO₂を増やしてどうするのですかという、ものすごく強いメッセージを出されています。地球というのは水の惑星だと。水の惑星というのはどうしてかということ、毛利衛さんが「諸君、大気というのは、りんごでいえば薄い皮のところだ。そこが実は大気圏で、そこで生存しているのだ。水はそこにしかないのだ」と。それが美しいというわけです。それが汚れている。どうしたらきれいにできるか。汚れているからきれいにしようということがあります。そして、その地球がどうして青く見えるかということ、もちろん表面積の3分の2が海によって覆われているからです。だから青い。

そうしたら、大陸といっても地球的観点から見たら大きな島でしかないと思えることができます。大小さまざまな島々が、地球の表面積の3分の1を分け合っているのだ、大陸といっても大きな島でしかないというように見立てる。そして、見立ては日本の文化ではありませんか。近江八景というのは、中国の洞庭湖でかかれた瀟湘八景というものがありますが、それを模して近江八景だ、琵琶湖八景だと思えるわけです。そういう見立ては日本の文化です。そうすると、日本を地球に見立てることもできます。北は亜寒帯、南は亜熱帯ですから。したがって、日本を地球に見立てたときに、地球をGarden Islandsにするという志は、人の心を打たないでしょうか。打ちますよ。

ツバルが今、死にかけています。あの美しい島々が地球温暖化で水位が上がって、陸の真ん中から海水が噴き出してくるということになっていますが、そういうことをどうしたらいいか、多くの人が考えるわけです。大小さまざまな島々をどのようにしたら生活と自然をともに楽しめる空間にできるかということは共通のものになるということで、日本は世界のモデルになりうると思います。これはちょっと日本中心主義だといわれれば、そうではないわけです。なぜかということ、先ほど申しましたように、京都はインド以東の東洋の文明の生きた博物館です。生きた博物館というのは、死んだ博物館があるからです。死んだ博物館は、例えば中国の長安です。これは、なるほどかつてペルシャ以東のすべての文明があそこで花開きました。しかし文化革命のとき、あるいは王朝が変わるごとに壊したではありませんか。ですから、今、建てているのは金ぴかぴかですが、単なる建物です。日本はお寺にお坊様が妻帯までして、税金も払わないでお住まいになっている。まさに生きた博物館ですね。そして、9・11が起こった後、だんだんアメリカ国内旅行をするのでさえ不便になってきた。かりにアメリカが、あるいはヨーロッパが斜陽になったときに、欧米がつくり上げた19世紀以降の近現代文

明とは一体どんなものだったのかということ、東京を見れば大体分かるということです。

そういう意味で、東洋の文明も西洋の文明も、この2000年の間に入れ切ったということにおいて、この国では地球的な地球社会が作り出してきた文明の成果というものが、我々の血となり肉となっているということです。そうすると、今度はもうモデルがない、しかし地球が美しくあれかしと願っている時に、この国は北緯45〜24度まで、亜寒帯から亜熱帯まで広がっているから、熱帯的なものも寒帯的なものも全部ある。そういう意味で、地球的なものを我々はこの島々の中に凝集して持っている。では、亜寒帯は北海道にしかないかということ、そんなことはない。屋久島はどうでしょう。1930mの宮之浦岳があります。今はもう、ひょっとすると美しい高山植物が咲いているかもしれません。この前までは冠雪していたに違いありません。上は亜寒帯です。しゃくなげが咲く。そして、高山植物がきれいな可憐な花を見せる。そして、下りてくれば、そこはガジュマルやハイビスカスなど、そして海にはさんご礁が周りを取り囲んでいます。つまり、亜寒帯から亜熱帯まで、日本が広がっているその縮図のようなものが屋久島にあるのです。それは日本は山国ですから、どこの地域にも似たようなところがあります。屋久島ほど典型ではなくても、秋は山から下りてくる、春は里から上がっていくというように、標高差の中で多様なものがどの地域にもあるわけです。

そういう意味からしますと、屋久島が典型ですが、日本のどの地域にも、いろいろな地域へメッセージを出せる素材が眠っているということです。しかし、まずは日本を Garden Islands として見立てて、世界を Garden Islands にすることが地球環境問題への日本の貢献だとしますと、まず日本の文化的景観を Garden Islands と見立てるというビジョンがあっているのではないかと思います。そして、お国の皆さま方は、これからはここで表彰状を差し上げて、壇上に居並ぶ時代が早く終わったほうがいいと思っているわけです。今まで日本は各地にある原料、人材を東京に結集して国力全体のパイを上げていくということに精を出してきて、それに成功し、欧米諸国から尊敬を勝ちうる、あるいは開発途上国の地域からあこがれの目を持って見られるという立場にまでなりました。しかし今度は日本全国の地域力というものを上げていくということになったとき、この国に結集した権限、財源、人材を地域に下ろしていくという時代がこれから始まらなければならないと思います。

全部それをこちらに1回持ってきたわけです。明治4年以降、廃藩置県で、地域分権を廃止して中央集権になってきました。今度はそれを下ろしていく時代です。下ろしていくトップになるのが、この三つの……。環境省、別に国がやる必要ありません。農水省、これは必ずしも国がやらなくても大丈夫なところがあります。内政の問題は地域に任せられます。国交省もそうです。どういう橋を造るか、どういうトンネルを造るかということは、地域の人が地域で決められるという面もあります。そうしたところから、国の役割は、外交、安全保障、防衛、通貨の管理、極めて大きな事業で、それを除けば内政にかかわるものは地域に委ねることができるという観点で、そしてなおかつ、文化的景観という観点から日本列島をぐっと鳥観する。大きなところは大きく見て、小さなところは小さく見ながら、今はとりあえず大きく見たときに Garden Islands だと。そして皆様がた、私たちが立っているこの東京は、出ても山が見えないでしょう。全部ビルディング・フォレストです。半径100kmの関東平野の中にあります。これの基本的な文化的景観の素材になっているのは平野です。この関東地域は日本で最大の平野が文化的景観の基礎にあると思います。

しからば、あとの地域はどう見えるか。関東地域が平野だとすれば、東北、北海道はどう見えるかといいますと、私は森ではないかと思います。東北にも北海道にも美しい山々がありますが、それが箱根よりも西にある山々、日本最高峰の富士山、その周りの箱根、その北側にある南アルプス、中央アルプス、そして木曾川を挟んだ向こうの飛騨山脈、北アルプス、さらにその向こうに両白山系があ

ります。まさにこれは日本山国、山という景観を持っているでしょう。そして、それが関ヶ原を越えて近江に入れば、近江の琵琶湖が勢多大橋から宇治川となって淀川に注いで、瀬戸内海に注ぐ。まさに瀬戸内海は、近畿と中国と四国と九州によって囲まれた海の州だという景観が見えてこないでしょうか。

一つの案です。北海道、東北は森ではないかという基調にあるのは、ここが野である、そして箱根以西は山だと。そして近畿以西は、世界で最も美しい多島海美を誇る瀬戸内海。国立公園に日本が最初に認定したのが瀬戸内海です。そして欧米人が、日本が開国した後、関門海峡から入ってきて、その美しさに見とれ、最も美しい多島海とたたえた瀬戸内海はまさに海です。海の州、山の州、野の州、そして森の州というようにとらえてみる。もちろんどの地域にも森があり、野があり、山があり、海があるわけですが、そうとらえてみるわけです。

そうしますと、国会等移転審議会が答申に出した那須野原というものの位置が見えてきます。彼らとはどうか専門家は、かりに東京から日本の立法権、行政権、司法権の三権を移すとすればどこがいいか。移す場所として、土地の取得の容易性はどうか、景観はどうか、水はどうか、地震の頻度はどうか等々、十幾つもの項目を全部数値にして、最高得点だったのが那須野原でした。「ここがいい」と、成田のようにどこかの運輸大臣が決めたのとは違います。客観的に最高得点だったのがそこでした。今日は福島県の三春町のかたが賞を受けられましたが、栃木県が尽きて、那須塩原から新白河に入る境目に那須野原があります。境目にあるという位置関係、平野が尽きて森に入る、森から平野に出るところが那須野原です。

かりにそこに日本の国の機能を移したとします。そこは、今のような霞ヶ関が全部移ることはありえないでしょう。地域の人が許さないと思います。小さな、しかし美しい町にするでしょう。防衛、外交、安全保障、その他、どうしても国にしかできないことがありますから、それを移しますと小さい強力な政府ができると思います。そのたまたまがどうなるかということです。京都を見れば、中国人は「ああ、何だ、これは唐の長安と一緒にじゃないか」と。東京を見れば欧米人は、「我々のまねをされて、若干、日本のほうがきれいにつくるようになったかな」と思ったりする。いずれにしても原型があるわけです。

つまり、京都にも東京にもそれぞれ特有の文化的景観というものがありますが、那須野原の景観はどうなるかといえば、野が尽きて森に入る、森が尽きて野に出るところ。どうでしょう。これを日本人はどうしたでしょう。平野が少ない。3割強しかない。それを田畑にし、また住居にするということで、その管理を古い時代から治山治水と一体にしてやってきました。そうした中で、平野の田畑の水、命の水を確保するために、この山を荒らしてはいけないとなったら、そこに鳥居を建てて、お社を建てて、鎮守の森として、ここは荒らしてはいけない、神様がお住まいになっているところだというようにしたのはありませんか。その鎮守の森は日本全国じゅうにあります。そして、関東平野が尽きて、北海道、東北の森に入るところ、まさに鎮守の森に入るところだというイメージができます。鎮守の森から出て関東平野に入っていくのだというイメージが持てないでしょうか。そうすると、今度の日本の顔は鎮守の森の都になります。

そうすると、京都というものが中心だったときには、京都にあこがれて、あちらこちらに小京都と。小京都といわれることが誇りであるという時代があった。東京が欧米の文物を入れる、いわば欧米の文物の変電所で、横のものを縦にして日本に配電するという変電所であったときは、私は京都出身ですが、京都でも比叡山の向こうには、三橋三智也さんの歌ではありませんが、そこから東京が見えるかいというような、京都でさえ東京へのあこがれがあった。東京の向こうには欧米があったわけです。

ですから、だれも彼もが「東京のように」「東京、東京」というような時代がありました。欧米の文物を追いかけたからそうだったわけです。

ところが、さあ、鎮守の森の都にモデルはあるでしょうか。ありません。これは日本のものです。そうした考え方が、あの紀伊山地の霊場と参詣道を文化的景観ゆえに文化財、世界の人類の共有財産としての世界遺産にならしめたものだとすれば、鎮守の森の都というものは日本じゅうにあります。つくれます。そうすると、東京に対してミニ東京ができたように、鎮守の森の都群ができると僕は思うのです。

そうすると、森といっても西日本の照葉樹林と北の落葉広葉樹とは生態系が違います。したがって、さまざまな森を大事にした都市群が、鎮守の森の都群ができる。亜寒帯的なもの、亜熱帯的なもの、温帯的なものが大事にされている都群ができる。なるほど砂漠はありません。砂漠というのは水の極めて希少なところですが、そういうものは幸いにして日本にはない。豊かな水に恵まれている。そういうわけで、他の地域の人たちから、あこがれます。そういう意味からいいますと、私はいずれそうなると思います。これは、なるというより、すると言わないと主体的ではありませんが、本当はしたいのですが、日本は「おれがこうする」と言う足引っ張り人がいます。ただ、どのようなイメージを描くかというところで、こういう考え方もあるのだということを知っていただいていると、きっと何かの参考になるのではないのでしょうか。

ちなみに先に申し上げておきますと、それでは北海道、東北には2000m級の山はほとんどありません。大雪山でさえ2200mです。岩手山は2100mあるでしょうか。岩木山というのは津軽富士といいますが、1700mほどではないかと思えます。低いのですね。だから森なのですが、その森の州の州都をどこにするか。野の州の州都をどこにするか。山の州の州都をどこにするか。海の州の州都をどこにするか。そういう州都誘致合戦や州都立候補合戦というようなものが出てくるでしょうが、私の考えを一つだけ申し上げておきますと、森の州の州都は仙台で決まりだというには私は思いません。

日本全体でつくった地域が森の州の中にあります。北海道です。日本各地の人たちの出身地でつくられた場所が北海道です。標準語が通じるところです。そこを励まそうではありませんか。森の州の州都は北海道、しかし札幌ではない。札幌は200万人もいて多すぎます。そして、新千歳空港と札幌はわずか1時間です。快速で行けば45分ぐらいです。その真ん中に恵庭岳というものがあるでしょう。今度、洞爺湖でサミットが開かれるそうですが、支笏湖のそばに恵庭岳があります。そこで札幌オリンピックが開かれました。森と湖のきれいなところです。そこは森の州の州都にふさわしい。札幌にも近い、空港にも近い。苫小牧東はほうったらかされていますが、そこも視野に入れることができる。そこがいいと思っています。

野の州の州都はどこか。これは東京であっても、大宮であっても、平野ですからかつてにやっってくださいという感じです。

山の州の州都はどこがいいか。これは第2候補地になったところがいいと思います。首都の移転候補地として第2候補地になったのは、美濃焼の産地です。きれいな里山のどんぶり館というものが建てられて、そこから見られます。「ああ、これが僕たちの原風景だ」と思わせるきれいなところがあります。東美濃、多治見、瑞浪、土岐といわれる辺りを中部地方の人は推されました。そして、海の州の州都は決まりませんので、岡山と広島は仲が悪い。大阪と阪神も仲が悪い。仲が悪いというよりも、皆古い歴史を日本は関西から発信していきましたので、地域性、個性が非常に強いのです。

ですから、海の州都なら海の州都らしく海に浮かべておくというのがいいということで、ある時には神戸港に寄港する、ある時には別府に寄港して温泉に入る。ともかくそうしておきますと、離島の

人たちが喜びます。離島の近くに州都が浮いている。動く Floating Island です。メガフロートという日本が作り上げた人工の島がありますが、メガフロートというのは英語ではありません。大型浮体構造物というものを日本人がかってに和製英語でメガフロートとしました。そこには会議場も造れる、運動場も造れる、病院も造れる。そういう技術を持っています。それを世界一美しいところに浮かべておく。そうすると、だれも争わない。そして海が汚れているかどうかというようなことが分かるということもありまして、そういう構想を持っています。

さて、このようになりますと、やがて東アジア共同体をどうして造るかというとき、その本部をどこにするかというときに、やれ北京にする、東京にする、いやシンガポールと争うときに、いや、東アジアというのは、韓国も半分島であり、38 度線で大陸と切り離されている。香港も島、台湾も島、東南アジアはほとんどが島々です。ですから、その共同体は、もし本当に共同して地域共同体になれるなら、別にどこかの場所に決めなくても、海に浮かべておけばいいというパイロットケースにもなるでしょう。そして、一国一制度で、大中国が一つになるというようなことが理想にできる時代はもう終わりました。国民国家をつくろうとしたヨーロッパでさえ、国民が選んだ人たちが戦争をして、お互い殺戮をして人が死ぬということを経験して EU をつくっています。そういうことにかんがみれば、日本も、一国数制度で地域の主体性に依拠して地域づくりをしていくという時代がこれからやってきます。

そうすると、学ぶものがどこにあるかという、これは地域にあります。自分たちの地域をどう作るかというのですから、欧米の軍事力、経済力、それを体現している軍事工場、あるいは紡績工場、鉄工場といったものをどうして作ったらいかというソフトを日本は大学で学んで、それでソフトを活用して、欧米が作るものを日本人は自分で作るということをしてきました。これは一応、終わったわけですが。それを媒介にしながら、今度は日本の地域力を上げていくというわけです。瀬戸内海には橋が似合うでしょう。山の地域にはトンネルが必要です。平野には環状道路が必要かもしれません。それぞれ必要とされるもの、景観が違いますので、インフラストラクチャも違うはずですが。どのようなものがいちばん似つかわしいかということは、自らの生活景観から、若干自分たちよりも広い地域も含めて自分たちの地域のことをよく知らなければ、我々は地域づくりも国づくりもできません。

ですから、福沢先生が、欧米の文物を学ぶことが新しい学問だと。「一国の独立の基礎は一身の独立にあり、一身の独立の基礎は学問にあり」。その学問とはヨーロッパの学問、西洋の学問である、経済学だ、法学だ、医学だ、工学だといわれました。それを我々はそれなりに、大学も 4 年制大学だけで 744 もあります。それなりにマスターしたのです。今度は、日本があこがれているのですから、テキストは地域にある。ですから学校の先生だけが先生なのではないのだと。地域の企業のかたも、それから住民も、官界も、保護者も皆、その地域の先生たりえます。地域ぐるみで地域起こしをしていく。それが全体として日本の国力を上げていくということになるのだと思います。

そして、その文化力は軍事力、経済力と比べたときにどう違うかという、軍事力というのは外に向かって破壊する力です。使えば不幸が起こる。経済力もまた、安い物を品質良く作って外の世界市場に出ていく。しかし、文化力は違います。これは内に引きつける力です。「わあ、いいな」と思わせる力です。いいなと思わせたら、それが口コミやいろいろな媒体によって広まって、人がたくさん来る。そうすると経済も発展する。内に引きつける力、格好良く言えば、Attractive power です。日本という魅力です。魅力をどう作っていくかということが、これからの文化力を発揮する課題であると思います。その魅力というものは、違うことによって際立つ。つまり、多様であるということが柱です。全部金太郎あめのようなになったら、日本も台なしになります。そういう意味で、地域力を起こす

ということは、自らの地域を先生としてそこから学ぶ。私はそれが子供たちにとっても模範になると思います。

ちょっと端折った形で、露払いになったかどうか分かりませんが、文化的景観から見たときの日本の国づくりのビジョンというものを描いてみました。何かのご参考にしていただければと思います。ご清聴ありがとうございました（拍手）。

（司会）ありがとうございました。川勝平太先生にいま一度、盛大な拍手をお送りください（拍手）。

皆様、最後までご清聴いただきまして、まことにありがとうございました。これよりパネルディスカッションの準備のため、およそ10分間お時間をいただきたいと思います。ご来場の皆様にお願いがございます。受付にてお配りしました資料の中にアンケートがあります。こちらは閉会後に出口にて回収します。ぜひアンケートへのご協力をお願い申し上げます。

「景観からのまちづくり、むらづくり」をテーマにしたパネルディスカッションは、この後、15時20分より開始します。お時間になりましたら、お席にお戻りください。